

ジャクリーン・ウィルソン：『ふたごのルビーとガーネット』

今回紹介する作品は、すてきな宝石の名前がついた、もうすぐ 11 歳になるふたご姉妹の物語です。すなわち、ルビー・バーカーとガーネット・バーカー姉妹の成長の物語です。名前に関しては、ルビー（紅玉）はこの原稿を書いている 7 月（むちゃくちゃ暑い！）の誕生石で、威厳と情熱を表すそうです。ガーネット（柘榴石）は 1 月の誕生石で、友愛、真実、勝利を象徴する石です。これらの「宝石の言葉」が作品の中でどう生かされているかも注目したい所です。

さて、『ふたごのルビーとガーネット』は、お姉さんのルビーと妹のガーネットのそれぞれの視点で、つまり交代に書かれていて、しかもていねいに字の太さを変えてあります。元気で普段は自己主張の強いルビーの視点が太字で、おとなしくて内向的なガーネットの視点が細い字でという具合です。

ルビーとガーネットはお母さん（オパールという名前、ちなみに 10 月の誕生石）が亡くなった後、お父さんのリチャードとおばあさんと暮らしていました。おばあさんは洋裁をしていて、二人は仮縫いにきたお客さんをいろいろと観察するのが好きでした。しかし、関節炎がひどくなって、おばあさんは洋裁ができなくなります。そしてそうこうしているうちに、お父さんは新しいパートナー（名前はローズです）を見つけ、一緒に暮らすことにします。おまけに、おばあさんはシニア・ハウスに行くことになり、今までの仕事をやめたお父さんは、田舎の本屋さんを買い取ってそこで新しいパートナーと本屋を経営することに決めました。こうして、大きな環境の変化の中で二人は自分というものを見つめ始めるのです。

そのきっかけは、女優志望のルビーがテレビ・ドラマ化される『クレア学院のふたご』（『おちゃめなふたご』シリーズのことです）の主演オーディションに応募したことです。ガーネットは本心ではあまり乗り気ではなかったのですが、ルビーに引きずられるように参加します。それも「あの子は、女優にならなくちゃいけない。だって、それこそ、あたしたちがいつもなりたいたいと思っているものだから」とルビーに決め付けられてしまったからです。小さいときの学芸会で失敗したことのあるガーネットは全く自信がないのに、ルビーは自信満々です。オーディションの本番でも機知のある受け答えでスタッフたちの注目を集めます。でも、ガーネットの方はスタジオに突然入ってきたお父さんに気をとられたこともあり、どぎまぎしてしまい、ほとんど何も言うことができませんでした。ガーネットは、「ルビーはスター。こんなふたごの妹がいてかわいそう」と思います。

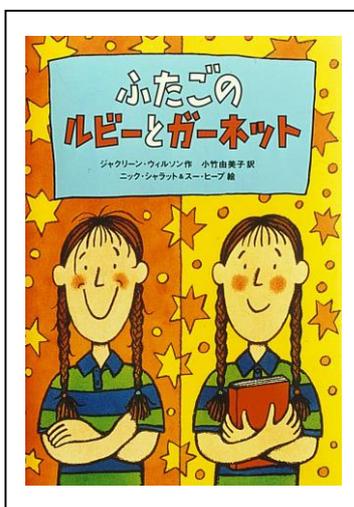
オーディションに落ちたルビーですが、落ちた原因をガーネットに押し付けることができたので、彼女自身は前のままで、元気いっぱいです。何とか田舎暮らしから抜け出したいと考えていた彼女は、テレビ・ドラマの「クレア学院のふたご」が撮影される「マーノック・ハイツ学院」の映像を見て、その寄宿学校に転校する計画を立てます。そして、校長に直接手紙を書いて、奨学金のテストを受ける所までこぎつけるのです。しかし、テストに合格して、奨学金を獲得したのは自信のないガーネットの方でした。校長は二人をよく観察して、ガーネットがルビーの影響を受けすぎて、何もかも引きずられて、自分自身の良い部分を伸ばせないことに気づき、ふたりを別々にした方が良いと感じたのです。

最初、ルビーはこの決定を受け入れることができませんでした。校長が自分とガーネットを取り違えたとすら考えました。ガーネットもそう考えました。それほど自分に自信がなかったのです。そして、一人で寄宿舎に行くことをやめたいとも思いました。そこでお父さんとローズは言葉を尽くして、今の状態なら別々の学校に行って、それぞれ別々の道を選ぶ必要があることを説明していきます。一生同じ

生活をするわけには行かないのですから。「おまえたちはおたがいに足をひっぱりあって、おたがいのチャンスをだいなしにしている。ふたりとも、大きくなったんだ。べつべつの姉妹として、それぞれの道を歩んでいかななくちゃならないんだよ」と。

すると、ルビーは髪をすっかり切ってしまい、ガーネットとほとんど口を利かなくなります。また、MEMORANDUM、つまり Me=自分について、at random=ちょこちょこっと書き付ける記録をつけ始めます。そうして、自分というものを貫き通していった先に、「あたしのふたごの妹。いちばんの親友。もう半分のあたし」ということばが待っているのです。つまり、二人は別人ではあっても、どこまでいってもふたごであり、「あたしたち、いつまでも、ルビーとガーネットだよ」なのです。ガーネットが寄宿学校に出かける朝、二人は心から仲直りします。そして、毎日手紙を書く約束をするのです。言ってみれば自分探しをしている間は、ふたりとも自分の良い面を出せずに、学校でもトラブルメーカーになっていたのですが、なんとなく自分の居場所を見出した後は、対人関係においても落ち着きを取り戻して行きます。ルビーには新しい男の親友ができました。そして、ローズとも家族としての信頼関係を結ぶことができました。

イギリスの人気作家の作品です。いつも言いことですが、名のある作家の作品はやはり優れていると思わざるをえません。また、ふたごにだけ通じる言葉や合図が出てきたり、二人だけが知っている仲直りの特別な方法が出てきたりして、実際のふたごの性質や習慣といったものにも精通している印象があります。もちろん、日本人のメンタリティーとの関係においては、ここまでくっきりと性格が異なるふたごは多くはないと思いますが、本書を特に、性格が対称的なふたご姉妹とその家族にお薦めいたします。最後に、日記やメモ、手紙などやはり「書く」という行為には自分を真に見つめさせる確かな作用があるとの僕の感想を付け加えておきます。



ウィルソン：『ふたごのルビーとガーネット』書影

ジャクリーン・ウィルソン：『ふたごのルビーとガーネット』（小竹由美子訳）偕成社。

『みそっかすなんていわせない』偕成社。

『バイバイわたしのうち』偕成社。

『マイベストフレンド』偕成社。